とりいまついせきつうしん
鳥居松遺跡通信　№6

（財）浜松市文化振興財団・浜松市文化財担当課　2008 年 3 月 19 日

金の刀が出土しました。

古墳時代（約 1500 年前）の川底から、金で飾った大刀（たち）が出土しました。この大刀は、大量の土器とともに、川の中に沈められた状態で出土しました。大刀の表面には細かな模様が施されており、表面に張られた金は、1500 年の年月が経った現在でもその輝きを失っていません。

貴重な大刀を手にできた人物は、この地方を治めた豪族階層です。古墳時代の有力者が鳥居松遺跡の周辺にいたことを雄弁に物語ります。川底に沈めた大刀にどのような願いを込めたか、今後の検討課題です。

■　円頭大刀の出土状況

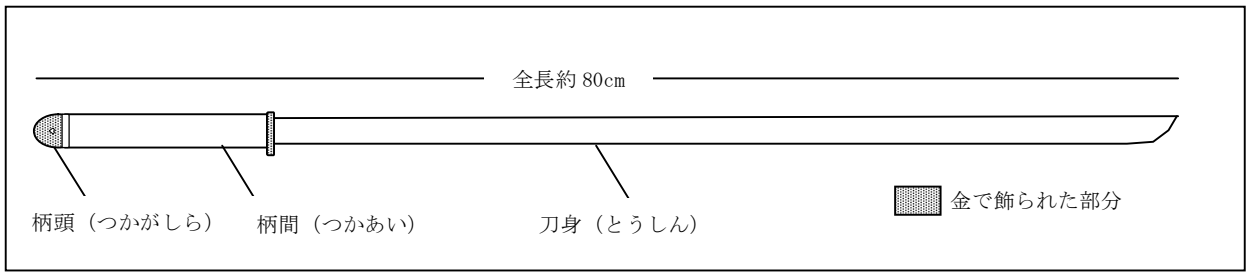
出土した大刀は、円頭大刀（えんとうたち）とよばれる種類のものです。柄頭（つかがしら）には細かな龍鳳文（りゅうほうもん、龍や鳳凰の模様）が彫り込まれ、その上に金が被せられています。国内では例が無い大変貴重な大刀です。一緒に出土した土器や大刀の模様の特徴から、６世紀前葉から中葉頃のものと考えられます。

金の刀は完全な形で出土しています。

金の刀は、鞘（さや）を抜いた状態で、川底に沈められていました。完全な形の金の刀を川に沈めた事例は、国内では例がありません。

■　円頭大刀の全体像

円頭大刀（えんとうたち）は全長約 80cm で、柄頭（つかがしら）に金が張られています。鞘が抜かれた状態で出土しました。



金の刀は保存のための処理をはじめました。

今回ご紹介した金の刀は、非常にもろいため、出土後すぐに、保存処理を施すことになりました。処理が完了するまで時間がかかりますが、1500 年前の姿がよみがえると期待しています。

編集：鳥居松遺跡発掘調査事務所　　TEL　053-442-0087